

序章

これから思考と感性についての話をします。まず野球の野村克也監督の話からはじめたいと思います。

もうずいぶん昔のことになりますが、テレビで見た野村監督のことをよく覚えています。たとえば、打者が甘い球を打ち損じたとき、次回からその失敗をくりかえさないようにするためにどうすればよいか。それには考えることが必要です。しかし、今度は失敗しないぞと考えるだけではだめなのです。必要なのは、どのように打ち損じたのか、まず感じる事が大切であると野村監督は言います。その感じたことについて考えることによって、打撃を改善することができるのです。ですから、若い選手にとって一番大切なことは感性を磨くこと

や、感じなかつたら何も考えやせん、人は感じるものがあつてはじめて、それについて考えるんや、と監督は語っていました。野村監督は幾多の大記録を達成した名選手であり、多くの一流選手を育てた名監督です。なるほど、名選手として活躍し、また名監督として何度も優勝した業績は、このような思考によって達成されたのだなと思ひながら見ていました。わたしはその秘訣を語っている監督のことばにとても感銘を受けました。すばらしい人だとすつかり感心した次第です。

野村監督が語っているのは打者の打撃についてですが、事柄は打撃に限定されるものではないのです。監督のことばは思考のありかたそのものの本質をついています。思考は感じるという感性なしには成り立たないと監督は語っています。この感じることを「感性的に見ること」と言い換えますと、思考は「感性的に見る」ことなしには成り立たないということです。想像することもこの感性的に見ることのなかに当然ふくまれます。思考と感性のあいだには緊密な関係があり、思考は感性的に見ることによって決定される、言い換えますと、感性的に見る（わたし）のありかたによって、何を思考するか、またどのように思考するかが制約を受けるのです。

現代のわたしたち日本人は、どのようなしかたでものごとを考えているでしょうか。まず、考えるものごとを、考える（わたし）が見据えて（＝考える（わたし）の前に考えるものご

とを対象として立てて) います。そのうえで対象を分析し総合するという作業を行っています。このような思考様式は、自覚することはほとんどないかもしれませんが、実は明治時代以降に西欧から輸入して、(これもまた) 西洋から輸入して整備された近代的教育制度のなかで体得した思考様式にもとづいているのです。このような思考様式はフランスのデカルトに代表される西欧の哲学者によって確立されたものであり(また後で詳しくのべることにします)、考える(「わたし」が主体として、考えるものごとを客体(対象)として見るという二元的な構造をしています。こうして見る主体としての「わたし」が、見える客体としての対象を分析し総合するのです。このように近代的思考の構造のなかで感性的に見ることは思考のありかたを左右する核心的な役割を担っているのです。

近代西欧で確立された思考の基盤をなす感性的に見ることがどのようなありかたをしているのかについてはこれから詳述するつもりです。あらかじめのべておかなければならないのは、主体・客体という二元的な対象構造にもとづく近代的思考様式をわたしたちが西欧から輸入したとき、その根底に存在し、成立の基盤をなしている西欧の感性的に見ることを放置したまま無自覚に受け入れたということです。これも後でのべるつもりですが、近代西欧における感性的に見ることと伝統的な日本における感性的に見ることのありかたは根本的に異質です。成立の基盤となっている西欧の感性的な見ることのありかたから切り離して、主

体・客体という二元的な対象構造にもとづく近代的思考様式を受け入れたということは、日本人は近代的思考の表層だけを輸入したということになります（夏目漱石は、現代日本の開化、言い換えますと、受容した西欧文化のありかたを「皮相上滑り」であると言っています）。このようになしかたで日本人は西欧で確立された二元論的な対象構造をもつ近代的思考を西欧とは異質なありかたをしている日本の感性的な土壌のなかに受け入れたのです。

日本人が西欧の近代的思考をその基盤に存在する感性的に見ることから切り離して受け入れたということは、受け入れるさいに日本の異質な感性的な土壌のなかに根づくような努力をしなかったということです。そのことは自分たちの感性的な土壌が西欧とは異質であることを自覚することがなかったということの意味します。日本人は、自分たちの感性的な土壌の異質性を自覚することなく、対象構造をもつ近代的思考を西欧の感性的土壌にあるがままの相において、西欧人になつたかのようなしなかつた（つもり）で受け入れたのです。するとどうなつたでしょうか。

対象構造をもつ近代的思考と日本の感性的土壌とは乖離したままですから、感性的土壌に根差すことのない日本人の思考は根無し草のように漂流するということになります（さらに、その自覚もないということになります）。さらに、思考する主体としての（わたし）の意識

が希薄な日本の土壌のなかで、〈わたし〉の思考が根無し草のように漂流するという事態そのものの自覚がなおさら困難になるのです。ヘーゲルは、分析するという活動は悟性（対象構造をもつ近代的思考のことです）がもつ力であり作業であると言っています（『精神現象学』Bd. 3, S. 36）。しかし、考へる主体としての〈わたし〉の意識が希薄で、漂流し続ける日本の近代的思考は思考としてのこのような力もちええないのです。その結果、さまざまな問題が生じることになります。具体的な事例は、また先で示すことにします。

これからお話しする内容について、あらかじめ全体の見通しをのべておきたいと思いません。

まず、西欧の近代的思考が成立する基盤である感性的土壌についてお話しします。続いて、近代的思考を確立したデカルトの悟性的思考と、その思考を超えて悟性的思考を自らの哲学のなかに止揚したヘーゲルの理性的思考についてお話しします。その後で、西欧の近代的思考を受け入れる前提として存在する日本の感性的土壌についてお話しします。続けて、西欧の近代的思考を日本がどのように受け入れたのか、西田幾多郎と志賀直哉の場合を事例としてとりあげて考察します。このような作業を終えた後で、受け入れた西欧の近代的思考が日本の現実のなかでどのようなありかたをしているか、具体的に検討するつもりです。最後に、西欧がジャポニスムの時代に日本から真剣に学ぼうとしたように、わたしたち日本人は西欧

文化を、悔あなどるのではなく、自覚的に真摯に受けとめる努力をすべきではないかという提言を
したいと思います。